

忘れ形見の鈴蘭人形・下

——鈴蘭。

学名：Convallaria majalis.

ユリ科スズラン属の多年草の一種。

白くて可愛らしい鈴状の小さなつぼみは観賞用としても好まれるが、強心作用を持ったコンバラトキシン、コンバロシドといった毒物を含む有毒植物でもある。

多量に摂取した場合、嘔吐、頭痛、眩暈、心不全、血圧低下、心臓麻痺などの症状を起こし、最悪の場合死に至る。

そんな鈴蘭だが、またの名を——

「君影草？」

亥の刻も回り、まもなく日付が変わろうとする夜分。

いまだ蝋燭ろうそくの灯が残る寺子屋の授業準備室で、アリスは慧音に向かってそう尋ねた。

「ああ。鈴蘭は丸まった大きい葉と白い小さなつぼみを付けるだろう？あの葉の影に隠れてひっそりと花を咲かせる姿が、殿方の影に寄り添う古き日本女性の印象と重なったそ
うだな。何とも健気な話じゃないか。そう思うだろう？」

またの説では首を垂れ下げて愛しい人を待ち続ける姿を連想させるのだとか。

それを象徴するかのようには、鈴蘭の花言葉には「純愛」そして「優しさ、愛らしさ」と
いった意味が含まれていると慧音は付け加える。

「ちよ、ちよっとストップ。確かにロマンチックな逸話があるのは分かったから」

慧音の説明に眉をひそめるアリス。聞きたいのはそんな蘊蓄うんちくなどではない。

慌てるアリスの呼吸に合わせるように、ゆらりと灯が揺れた。

蟬燭があるとはいえ、窓すら無い物置にも似た造りの部屋の中では、互いの表情をはつきりと読み取るとは難しい。現に今こうしてアリスが怪訝けげんな表情を浮かべたことすら、果たして慧音に汲んでもらえているかは定かではない。

やや大げさに深いため息を吐いてみせるアリス。そんなアリスの反応に気が付いたのか、慧音はやや物足りなさそうに「ふむ」とだけ返事をした。その後手前の湯呑みにお代わりを注ぐと急須の口を回して言った。

「自分の分は自分で注いでくれ。でないと溢しかねないからな」

「ええ、ありがと」

慧音から急須を受け取る。慎重にこぼと音を立ててお茶が注がれる。両手ですくうように湯飲みを口元へ運びがてら、アリスはそのまま顎先を上げ、薄暗い室内を仰ぐように視線を歩かせた。

今、この部屋にいる人物は全部で三人。

アリスに慧音、それから先ほど人が変わったかのような態度を取って見せたメデイスンはいえ、今は糸の切れた操り人形の如く大人しく寝息を立てている。

「そうだ。メデイのこともよ。この子はいったい何者なの？ 第一、どうして私の過去をこの子が知っているの？ あなたの言う異変と私たち、いったい何がどう関係しているの？」

最後の方はやや怒気を孕んだ物言いだった。

「まあそういきり立つな」

捲し立てるようなアリスの質問攻めに今度は慧音が眉を寄せる。

「だって……」

目の前に座るのはようやく探し当てた『K』だ。まだまだ聞きたいことは山ほどある。

しかし一方の慧音はあくまでも毅然きぜんとした態度を取ったまま、目の前の湯呑みをゆっくり口に運ぶと、

「気持ちには分からんでもないが……そうだな。何を話したらいいか」

迷っている。そんな口ぶりだった。

か。 どういう道筋を立てて何から話すべきか。 或いは真実を話すべきか、打ち明けないべきか。

この時の慧音の気持ちとしては本当にすべてを話してやるつもりでいたのだろう。 が、アリスが受け取ったのは皮肉にも後者での意味だった。

「まさかとは思うけど、この状況ではぐらかしたり誤魔化したりしないわよね？」

「おいおい心外だな。 ちゃんと順を追って話してやるさ。 いきなり事実だけ話されても気持ちの整理も追いつかないだろう？」

「それは、そうかもしれないけど……」

視線を泳がせながらアリスは横に座っているメデイスンを一瞥いちべつした。 慧音がその事実を隠蔽いんぺいするほどの歴史的な大異変。 その名前を聞いた時から薄々勘付いてはいた。

「君影草異変……だったわよね？ まさか、そんな大異変の犯人がこの子だって言うの？」

紅霧異変しかり、永夜異変しかり。 幻想郷で起きる異変の首謀者といえ、多くが組織立った者たちの仕業であった。 ましてや妖怪として生まれたばかりのメデイスンが、そんな大規模な異変を起こしたとはとてもじゃないが思えない。

表情を曇らせるアリス。 何しろ今から聞かされるのは、自分の知らない過去の自分の出来事……らしい。

今の今まで自分が正しいと信じていた記憶に、すっぽりと穴が空いていたなどと思いたくないのが普通の反応だろう。

「まあ待て、そうじゃない。そう先を急ぐな」

しかし慧音は落ち着きを払って言った。

「かつて人里を襲った大飢饉。ここまでは話したな？」

「ええ。今の人里を見ている限り、とてもそんなことがあったようには思えないけど」

確認を取る慧音に対し、やや否定的に返すアリス。

お得意の人形劇を披露するため、人里を訪れることは度々ある。頻度はそれほどではないにしろ、恐らく妖怪の中では人里に慣れている部類に入るだろう。

「それだけに尚更信じられないわ。むしろ人里の生活水準は日に日に上がっているじゃない。それに、さつき私もその異変の被害者だって言ってたわよね？ 私が幻想郷に来たのなんてつい数年ほど前のことよ」

史上最悪の飢饉があったにしては、今の幻想郷にはその爪痕が無さ過ぎた。豊穡の神が里に頻出するようになってからは不作という話もほとんど聞かなくなっていたし、水路といたったインフラ設備もある程度整い始めてきている。電灯が灯る日もそう遠くはないだろう。アリスにとってはどうでもいい話だが、近頃は山の神が始めた核融合なる未知の技術に興味を示す里の若者もいるらしい。

「もしそんな大飢饉があったのなら、たとえ人々の記憶から失せていても、何かしらの痕跡が残されているはずじゃない。あなたの能力はそこまで何でもありなのかしら？」

無論、そうではないだろうという意味を多分に含んだ言い方だった。そんな並外れた能力はあの妖怪賢者ですら持ち得ないだろう、と。

「仮にパラレルワールドのような瓜二つの世界が存在していて、大飢饉はそっちの平行世界で起きた出来事でした。そんな話をされた方がまだ信じられるレベルよ」

「確かにお前の言う通りだ。事実を隠した程度では飢饉は収まらない。不作続きの年があったという記憶を人々から消せても、急に豊作に変わるといふことはあり得ないからな。

病だってそうさ。歴史を食ってみせたところで病に伏した者が急に元気になったり、治療法が見つかるわけでもない」

「だったらどうして……」

「さつきも言ったが、不作や病はあくまで飢饉の副産物でしかないんだ。本当に恐ろしいのは——」

「人々による口減らし、でしょ？」

「ああ」

相槌あいづちとともに慧音の角が上下に揺れる。

「繰り返しになるが、この幻想郷は皆にとっての桃源郷でなければならぬんだ。だが里

で不幸な出来事があったのも紛れもない事実……あつてはならない事実だ」

「だから隠した？」

慧音の視線が明らかに下がった。アリスにはそれが、出来ることならやりたくはなかったという後悔の表れにも見えた。

「さっきお前は私にこう言っただろう？ 私のやったことはただ現実から目を背けただけだ。人間が成長する機会を奪っただけだ、と」

「あー……」

今度はアリスが目をそらす。ついカツとなって言い過ぎたと肩を竦めた。

「あれな。実は、結構ショックだったんだぞ？ 私だって、本当なら、能力を使わずに済む方法を、取りたかったんだ。けどな？ あの時は……そうするしか、他に……今だからこそ、こうして思い切った話ができるが……」

「……ごめん。私、あなたの立場や気持ちも考えないであんなこと言って」

小さく鼻をすする音とともに慧音の角が今度は左右に揺れた。

「いや、いいんだ。私がお前たちの記憶を消したのは紛れもない事実なんだ。それに——」

「それに？」

「嬉しかった。妖怪のお前が本気で怒ってくれたことに。本気で里のことを想ってくれていたことに」

「……ま、そりや私だつて里は嫌いじゃないし。それに身勝手な方法を取ったのならともかく、他にやり様がなくて仕方なかったっていうのは今の話で十分伝わったもの」
「そうか、そう言ってもらえるとこちらとしても助かる」

慧音は湯飲みを手に取ると、一気に中身を飲み干した。飲み干した後も、しばらくの間天井を見上げたままであった。

「馬鹿ね。無理しなくていいのに」

「ああ、そうだな」

慧音が今どんな表情をしているか、この時ばかりはアリスもはっきりと知ることができた。



「すまないな。見苦しいところを見せて」

数分後、すっかりいつもの調子を取り戻すと、慧音は急須を新しいものに取り替えながら口にした。

「いいわよ。別に。本当ならもっと取っちめてやるくらいのもりで来たんだし」